
ベタなRPGの中に入ってしまった

椎名 素一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ベタなRPGの中に入ってしまった

【Nコード】

N4945Y

【作者名】

椎名 素一

【あらすじ】

主人公はベタなRPGが好きなダメ人間。
その友達の変人が、RPGの中に吸い込まれます。
そこで、魔王倒しに行きます。

吸い込まれた（前書き）

この設定がベタだよね。

吸い込まれた

俺はベツタベタなRPGが大好きな、新高校一年生。第一志望の高校にギリギリで受かり、有頂天な気分浸っている、ダメな人だ。そんな俺にも一応友達と言える人が数人……いや、嘘をつきましたごめんなさい。一人です、はい。

そいつは「俺にとって変人と言われる事は、ほめられているのと同じだ!」と豪語する変態で

名は窪木夕くぼきゆうと言う。ちなみにそいつは不登校かつネクラという疎遠される属性を持っている。俺こと崇奇運命すつきうんめいはネクラで不登校になりかけである。

……「類は友を呼ぶ」とはこの事だろうか？ 自分で言ってる、もの凄く悲しくなる。

まあそれは置いて。俺はこの前ネットで面白そうなRPGを見つけた。

名前は「魔王を倒そう」……普通の人には超超超超つまらなく見えるだろう。

だがしかし、俺と夕はこの、実にベタベタそうなゲームが大好きだ。

そして一週間待って待って待ち続けた。その間夕はもちろん不登校、俺は一週間のうち三日しか行かなかった。そして……

「届いたあああっつっ!」

俺は歓喜のあまり叫びながら自室を走り回った。

母親に思いつき怒られた。

まそんな事は気にせず、すぐさま夕にメールした。

件名：届いたか？

本文：おいつ、俺のところにあのゲームが今届いたぞ。

簡潔にまとめて送信した。

すぐさま、返事が返ってきた。流石ネクラ歴五年の腕だ、速すぎるくらいの速さで返信が返ってきた。

件名：届いてるよ

本文：届いてるし、いちいちメールして来るな。

いらつ、ときたがそれもまあ仕方が無い。

なにせあいつは天才的な腕前のハッカーだからなあ。それで毎月500万は稼いでいるらしい。

そういふ奴なので、邪魔はせずP〇3に「魔王を倒そう」を入れて電源を入れた。

ジジジジジジ……ガキョンツツ！！

「ぎゃああああああつっつっ！！」

お、俺のP〇3がああああつっつっ！ やつべ〜よ、これ母親と父親にねだりまくってやつと買ってもらえた代物だぞっ！ この野郎！と俺が心の中で発狂していると、急にガキョンという音がしなくなり、ジジジジ……

と、もとの音に戻った。

そして画面が真っ白になった途端に、俺は体が画面の中に吸い込まれていく感覚に陥った。

いや、吸い込まれている。ガチで。

「え、ええ、何何何何！？ やだよ！？ やだやだやだやだ。う…

…っ、うぎゃああああ

結局画面の中に入ってしまった。

俺の体は落ちてゆく、もの凄い浮遊感。そして真っ暗。目を開けているのに真っ暗って、気持ち悪いよね。

そして……

ドサッ

かなり高い所から落ちたのに、全然衝撃が少なかった。なのに、足が全く動かなかった。足の指一本も動かせない。目は徐々に見えるようになってきた。

部屋の中にいたはずなのに下には土の感触があり、何かに覗き込まれている気がする。

……怖い、超怖い。だが俺も男、意を決して目を開けてみるとそこには……

犬がいた。三頭犬だった。

「……………」

声が出なかった。とりあえず、ゆっくり、ゆっくり後ずさる。だがそれに合わせて三頭犬の方も、ゆっくり、ゆっくり近づいてきた。

ゆっくり後ずさるのは無理だと思った瞬間、犬に背を向けてダッシュしていた。

体が勝手に逃げを選んでしまうのって、情けねえなあ。

って、そんな場合じゃないだろ俺！　とりあえず逃げろんだ！

「うおおおおおおおおお！」

俺はこのあと、俺と同じ境遇の奴に会う事になる。

吸い込まれた（後書き）

気がついた所があったら、指摘してください。

ついに冒険へ

俺は高校に受かって有頂天になってるダメ人間。

友達もネクラなやつだけ、しかも一人だけ。

そしてベタなRPGが大好き。ネットで探しては買いあさっている。そして買ってみたゲーム「魔王を倒そう」……涎が出そうなほどのベタベタRPG。

ゲーム機に入れて電源を付けてみた。そしたら……

吸い込まれた。

ゲーム画面に。

そしてモンスター（三頭犬）に追っかけられる俺。おっと、こんな事を考えている暇に追いつかれたあああああ！！

「ひいひいひいひい。く……っ、くるなあああ」

お決まりの台詞を吐きながら逃げる俺。あ、あんな所に丁度良い穴が開いている木が。

最後の力を振り絞れええええ！！

「うにゃおう¥＃\$%&\$%&\$＃¥\$%」

力を出しすぎて口から変な声が出たが、気にしている暇が無いからな。

そして……

「うりゃあ」

ガンツ！ ふー、間に合った。さすがに死ぬかと思った。でも、もうこの穴の中にいれば大丈夫だ。

ふー、ネクラに走らせる距離じゃねえなあ。こういう時は深呼吸だな。

スーハー、スーハー、スーハー、スーかさつハー？

おいちよつと待て、何か奥の方で音がしたぞ？ ……気のせいだよな。まあ、まだ息が切れているので深呼吸、深呼吸。

スーかさつハー、スーかさつハー？、スーかさかさつハー！？、スーかさかさつはあああつっ！？

「うおおおい」

なっ、何だ？ ちよつと、ちよつと、ちよつと。まだ死にたくないよお。

「……………数奇か？」

この声はどこかで聞いた事がある。あれ？ でもどこだっけなあ。

「…お前の唯一無二の親友を忘れたのか？ かなり傷ついたぞ！」

「ああ、お前かあタ！」

おお、ここで唯一無二の親友と出会えるとは。全っ然嬉しくないけどね。まだ穴の外で犬がバウバウいつてるしね。

30分後

「なあ、もう犬去ったかなあ」

「…ああ、もう大丈夫だろう」

三頭犬の恐怖にさいなまれる事、三十分。ずっと穴の中で他愛もない会話をしながら耐えた（恐怖感じてないんじゃないやね、ていうぐらいの他愛もない会話）その時、ふと声がした。

『いや〜追い払うのに苦労したねえ』

「なあ、今のお前の声？」

「…ちがう」

「今の外から聞こえたよな」

「…ああ」

と、いうわけで、穴の外に出る。そして空を見てみるとそこには…

… 仏陀がいた。

後光が輝いている。

初対面なのでタメ語を使う。

「えつと、助けてくれてありがとうとごぞいした」「

いきなりタメ語!？」

「おお」「

えつ、なぐに」

「ノリ良いんですね」「

「うん、仏陀だから」

「関係ないよねえ!」

あれ? 急に夕が黙った。と思ひ夕を見てみると、目を開けたまま寝ていた。

凄いな。感心する。目の前に神がいるのにね。

「あら、寝てる?」

「さーせん」

「ねえ、その口調もうやめてくんない? ま、いいや。

とりあえず、どっちが勇者になるか決めて」

「ええ!」「

その宣言を聞いてすぐさま睨みあう俺と夕。そして……

「俺がお供だつっつ!」「

「ええええええええ!」

「ジャンケンポン!」「

「ええええええええ!」

「ぐあああああ」

「……(キリッ)「

『ええつとね、なんで脇役を争ってるんだい？』

「脇役の方が見せ場多いからに決まってるでしょう！」「

俺と夕の長い説明が始まったので割愛します。

3時間後

『あつ、もういい。数奇が勇者。夕が魔法使いね』

「ああああああ！」

「……………（キラッ）」

『はいはい、装備と剣は着けといたから』

「えつ」「

はっ、いつの間！ もっとこうなんかねえ、ピカッとなるとかないもんかね。

『じゃあ、東にずっと進んでそしたら町があるから』

「おいつ、何ていう町か教え……………」

シュツ

二人取り残された。

「……………行くか……………」

「…行くこう」

とりあえず腰についてたコンパスで、東はどっちかなあと探して、とりあえず東へ向かった。

このゲームの世界で何とかやっていけるだろうか？

俺と夕はそんな心配をしつつも、魔王を倒す冒険へと出かけた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4945y/>

ベタなRPGの中に入ってしまった

2011年11月26日01時45分発行